

平成30年2月19日

「この人に聞く」成熟社会と建築

村松 伸（むらまつ・しん）氏

プロフィール 1954年静岡県生まれ。建築史家，東京大学生産技術研究所教授。専攻は，「アジア都市・建築・空間史」，



「アジア近代建築及び町並みの保存と再生」。1978年東京大学工学部建築学科卒業。1980年東京大学工学系大学院建築学専攻博士課程進学。1981年中国政府留学生として清華大学（北京）留学。1987年東京大学工学系大学院建築学専攻博士課程満期退学。2008年東京大学生産技術研究所教授。2009年総合地球環境学研究所教授，現在に至る。『中国建築留学記』（鹿島出版会，1985），『上海—都市と建築1842—1949年』（Parco picture backs，1991），『中華中毒—中国的空間の解剖学』（ちくま学芸文庫，2003），『シブヤ遺産』（バジリコ，2010），『メガシティ』（全6巻，東京大学出版会，2016—7）など編著作多数。

東京大学生産技術研究所教授である村松伸氏に，日本のような成熟社会における建築の役割について，建築史研究の観点を中心に伺った。

■成熟社会における建築史研究の役割

これまで建築史研究というと，現存している古建築や当時の文献を基に調査を行い，建築がどのような経緯を辿ってきたかを明らかにして，さらにそういった古い建築の保存，修復を行うというものでした。

日本における建築史研究の始まりと言えば，今から150年前の廃仏毀釈の時代で，建築史研究の役割は，伊東忠太氏を中心とした，壊れていくものを保存し，建築を通して自分たちのアイデンティティを確保しようというものでした。そして次の世代に，どう保存修復するかをテーマに，太田博太郎先生や稲垣栄三先生は，古建築を単に国家のアイデンティティとして見るのではなく，さらに精密に分析して保存修復に役立てようとした。その後，'60～'70年代の高度経済成長期になって，都市再開発によ

り、明治、大正時代にできたものが次々となくなっていく中で、鈴木博之先生や藤森照信先生によって、近代建築史が研究されました。私は、そういうところを大学で学んで、1981年に中国に行ったのですが、当時中国がまさにこれから経済成長するという時期で、様々なものが失われ始めた時期だったので、東アジアの近代建築の研究を始めたのです。

つまり、時代によって建築史研究の姿は変化してきていて、最近の傾向では、これまでと違う分野へ建築史の専門家が関与し始めています。例えば、過去を未来に結びつけようとする際、今現在、何が問題なのかと考えたときに、「震災復興」「少子高齢化社会」「エネルギー」といった、現代社会で誰もが考えているような一般的なテーマに行き当たります。それらに対し、建築史研究的アプローチでどう関与し貢献できるかが重要となってきたのです。

また、日本は成熟社会になっていて、経済も安定期にあり、人口が減少、高齢化している。このように社会全体が停滞しているときに国威発揚でも、都市の再開発でもなく、まさにすべてが過去のものとなって、動きが止まってしまった現在の日本で、一つの手法として、建築史研究的アプローチを使ってみようと、私は考えています。

例えば空き家の問題がなぜ起こってきたかというのは、過去を見ないと分からない。原因を明らかにしなければいけない。それはやはり私たちの役目ですし、それから、失われていくものを残すことによって、それが人の心を捉えて豊かにする。そういう役割というのが成熟社会の建築史の在り方でもあります。つまり、一般の人や経済などの様々な専門家たちが、全く同じようなところに立って、同じ課題を私たちの専門、つまり建築史研究から、発見し、分析し、解決しようというわけです。大学の授業でも、従来の建築史と並行して、地球環境や震災復興といったテーマに関連付けた内容にも取り組んでいます。

また、最近の活動として、東南アジアの近現代建築を保全しようという国際会議を継続的にやっています。建物のリストをつくって保全するというだけでなく、日本も昔そうでしたが、現地には古い植民地主義のものは壊してしまえとか、新しいものは余りよくないといった偏見があるので、そういう偏見を変えていく役割を意識して活動しています。向こうの学生たちや専門家と一緒に研究活動を行い、一方的に教えるのではなく、お互いに学び合うという姿勢をとっています。日本は成熟社会になったので、それを外に向かって伝えて、一緒に学び合おうということです。日本一国だけ、自分の国だけやるのではなくて、これからは__

地球全体を見る必要があるのです。

どの国も自国とヨーロッパの建築史だけを偏って学ぶ傾向があって、自分の隣の国の建築の歴史は全く知らない。

東南アジアはお互いに近いのですが、お互いのことを全然知らない。インドネシアはタイのことを知らず、タイはベトナムのことを知らない。そこで、それをつなぐネットワークを私たちがサポートしてつくろうというのがここでの役割です。そういう役割というのは、私たちに課せられたものかなと思っています。

■建物保全の周辺環境と「なかなか遺産」のねらい

私たちの周りの環境には、自然環境、経済環境と社会環境があって、その中で建物の保全に取り組まなければなりません。その場合、建築の歴史の専門家は、往々にして単に「建物自体が素晴らしい」と言いがちです。古くて、この有名な建築家がつくって、希少だから残そうと。しかし、経済的にペイしなければ壊す判断もあるので、そこは常に責任を持って考えなくてはいけない。一方、社会環境で考えると、いくら経済的にペイしなくても、コミュニティの人たちが残すことを決断すれば建物は残すことができる。

つまり、技術的な問題だけではなく、建物自体の、いわゆる狭い意味での建築史的な価値だけでは保全できないので、こうした社会との関係をもっと広く考える必要があると、私は考えています。

建物の保全は、物理的な建物だけではなくて、それを取り巻く様々な現象、社会環境、経済環境を見て進めないと残せるものも残せない。さらに、建物を残すことで、社会や経済をサポートできるものにしていかなくてはいけないとも考えています。

私と東大生研の同僚の腰原幹雄先生でやっている「なかなか遺産」で、地域にあるな_か_

な_か_なものを発掘するのも、成熟社会、空き家問題や地方の空洞化に対して、何か貢献したいという思いが込められています。国の重要文化財や世界遺産とはいかないまでも、どこにもない特異性を持ち、地域コミュニティの結びつきを担い、様々な形で恩恵をもたらせ、見る人を「なかなか〜！」と唸らせるような、次世代に継承させたいと自然に思えるようなものを「なかなか遺産」と定義づけて、認定を行っています。

皆さんが世界遺産登録を目指すのは、プライドを創ることもあるでしょうが、結局、観光による集客が大きな動機ですよね。でも、人がたくさん来て、却って地域が崩壊してしまうこともある。それでは本末転倒なので、

「なかなか遺産」は、建物そのものだけではなくて、建物を保全することによってコミュニティを活発にしよう、そこにいて文化を活発にする、あるいは自然自体を豊かにしたいということをして日本の地域の中でやっていく活動です。余りにも巨大化してしまった世界遺産に対するアンチテーゼ、あるいは日本の文化行政における文化保全特有の、きっちりしてしまっていることによって身動きがとれないようなもの、それに対するちょっとした「そこそこ」な異議申し立てのような意味合いもあります。

■成熟社会の建築は何を目指すべきか

建築が人類にとって本当に重要かどうかを示すことは結構難しく、私自身は最重要なものとしては考えていません。少し前に、京都の総合地球環境学研究所で「メガ都市プロジェクト」というのを6年間やっていて、それは世界中の人口1,000万人以上のメガ都市が地球環境にどのような影響を与えるかをテーマとしていました。地球環境全体で考えると、食料問題、温暖化等、様々な問題が起こってくる。そこへ建築も寄与する必要があるし、建築史研究も貢献するところがあって、新しいものをつくるときに、その地域に合った都市なり建築のあり方を追求しようというものです。

世界は一律ではなく、僕たちが「地域生態圏」と呼んでいる七つくらいの地域に地球は分けられます。それぞれの地域には歴史があり、気候生態があって、そこに生まれた植生があり、固有の特徴があります。そこへすべてヨーロッパやアメリカで生まれたものを批判なしに直輸入するのは全くナンセンスで、本来そこに合ったものの方が環境に負荷をかけないの明らかです。エアコンよりも窓をあけて快適な方が圧倒的にいいわけです。こうした価値観を変えなくてはいけない。価値観を私たちは変えることによって、地球環境に負荷がかからない都市や建築をつくっていければいいのではないかと。普通に安くて、そこに適したものが、建築としてできたらいいだろうと考え、それを建築史研究から推進しています。例えば、最近関心を持って進めているマドについて人類の誕生から現在までを全球的に分析する「マドの進化系統学」というのもその一つです。マドは、まさに環境と人間の営みの接点ですから。

いずれにしても、僕の専門分野の建築史研究は、古いことばかりやっていると滅入ってしまうので、過去を利用して、今を分析し未来に役立てるといふ現実との接点を見出しながら常に研究を行っています。